

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	木村 欣司	指導教員 (主査)	内山 千鶴子

論文題目	口腔運動機能低下予防における介護予防講座の効果の検討
------	----------------------------

本文概要

【研究背景】

介護予防における口腔機能向上プログラム（以下プログラム）に関する研究では、口腔衛生・口腔運動機能に関してプログラム前後の機能水準の比較しかされていない。プログラム以降も口腔体操が継続されるのか、また、口腔運動機能が維持されているのかについての研究は無い。また、介護予防の根本理念は「心身ともに健康に自立して生活を営める」ことであるが、心身ともに健康であるかどうかは主観的健康感に影響される。そこで、口腔運動機能においても、主観的口腔健康感が口腔運動機能と関連すると考えられるがこのことに関する報告は無い。

【目的】

本研究第一の目的は、プログラム実施終了後の、口腔体操取り組み（以下 Home Exercise）の実施状況を調査することである。第二にプログラム実施終了後の、口腔運動機能の状況と主観的口腔健康感の状況を調査・検討することである。

【方法】

対象は3つの地域高齢者クラブに所属する65歳以上の高齢者であり、「口腔運動機能に影響する脳血管障害・変性疾患などに罹患している方」を除いた71名である。その対象へ摂食嚥下に対する指導を含めたプログラムを実施し、1週間の Home Exercise 回数の推移と口腔運動機能をプログラム終了直後、3か月後、6か月後の3期で比較した。それと同時に主観的口腔健康感も調査した。

【結果】

プログラムの実施により、口腔運動機能と主観的口腔健康感は向上を認めた ($P < 0.05$)。プログラム終了後の Home Exercise 回数の推移は、プログラム終了後から3ヶ月後に Home exercise の実施回数は減少し、6ヶ月後になっても実施回数は減少したままであった。しかし、その中で Home exercise を週3回以上実施している方（以下週3回以上群）は、3ヶ月後では反復唾液嚥下テスト積算時間の1項目に改善を認め、その他の口腔運動機能項目は維持されていた。6ヶ月後はプログラム終了後と比べ、口腔運動機能3項目に改善を認めた。主観的口腔健康感の状況は、口腔運動機能評価と同様に期間が経つにつれて、主観的口腔健康感は向上・維持されていた。

【結論】

プログラム終了以降の Home Exercise 実施回数は、プログラム終了時と3ヶ月後の3ヶ月間で減少していた。他方、1週間の Home Exercise 実施回数に着目すると口腔運動機能は、週3回以上群では、口腔プログラム終了以降も口腔運動機能は維持され、向上する項目もあった。プログラムにより、主観的口腔健康感は口腔運動機能の向上とともに向上した。今後はいかに Home exercise を実施してもらえるかが課題となる。